
最期の空

霜月 沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最期の空

【Nコード】
N4638A

【作者名】
霜月 沙羅

【あらすじ】
偽物の世界に別れを告げた、一人の少女と残された人々の物語。

1 真っ赤な空。

少し、寒かった。

腕時計に目を落とす。4時52分。あと、もう少し。

フェンスに寄りかかると、金網が背中に食い込んで少し痛い。でもその痛さが気持ち良かった。

風が冷たい。

何か羽織ってくれば良かったなと思った。でも今更取りに戻るのには面倒だし、意味のないことだと思う。

そして、目をつぶってみた。

少しだけ鼓動が早くなる。

思い出したから。惨めで、皆に好かれようと必死だったあの頃の自分を。

私は周囲に対して鈍感だった。親も、友達も、私に与えてくれるものも全て本物だと信じていた。

でも違った。

何で、私の聞こえるところで言うのだろう。

私は泣きながら『友達』の話し声に耳を傾けていた。

おかげで色々な事が分かった。そして、これから起きることも。私は次の日から泣かなくなった。

敵だらけのこの世界で泣くのは、無意味なことだと分かったから。

親は子供を一番の宝物と思っているなんてのも、もちろん嘘。

いつもお酒ばかり呑んで、まったく私に関心がなかったお母さん。いつも帰りが遅く、たまに会ったかと思えば私を叱ってばかりいたお父さん。

皆嫌い皆嫌い皆嫌い――。

親も。友達も。この世界の全ての人が私は嫌い。

目を開けると、さっきと変わらない景色がそこにはあった。でも、もう心臓はいつもと同じ速さで動いている。もう一度腕時計に目を落とす。

4時58分。

まだ6分しか経っていないかったんだ。

そろそろ準備をしよう。

私はフェンスを乗り越え向こう側に移った。

下を見ると、コンクリートが私を待ち構えていた。

その時急に怖くなった。

私の身体が、あの固い地面に打ち付けられるなんて。

そして次にどうでもいいような些細なことが脳裏に浮かんできた。

4年前もらった誕生日プレゼント。

小学校の修学旅行で好きな人を打ち明け合った夜。

5年前親と一緒に رفت 海。

そして、私の笑顔があつたあの頃。

そんなことを思い出してたら胸が苦しくなつた。

でも、もう戻れない。

今更戻る訳にはいかないんだ――。

もう5時だ。

大丈夫。これをやり遂げたら、自分は幸せになれるんだから。

私は一度深呼吸をして天を仰いだ。

そこには泣きたくなくなるほど綺麗な夕日が出ていた。

私の見る最期の空。

「ばいばい」

そして私は偽物だらけのこの世界に別れを告げ、地上に舞い降りた――。

私の、最初で最期の想いは、皆に届いただろうか？

2 真っ青な空。

こうして、私の15年間の人生は幕を閉じた。
何もかも終わったと思っていた私だった。

けど――。

それは、放課後の教室。

「友達いなかったもんね、あの人」

そう言ったのは私と一回も話したことのない人。

「でも自殺するなんて…」

そう言ったのは私の後ろの席だった人。

「まあ…嫌いだったけど、クラスメイトだったし」

そう言ったのは何かにつけ私につかかってきた人。

「ユリ達、最初あの人と友達だったんじゃないの？」

一人が訊く。

「うん…。でも、だんだん嫌になってきたっていうか…」

「ハブる以外に方法がなかったんだもん」

そう答えたのは、前まで『友達』だと思っていたユリと美智子だ…。

「だからってさあ、あの人の聞こえるところで悪口をいうことはなかったんじゃないの!？」

突然叫んだのは、ユリ達と比較的仲の良い人だった。

彼女が涙をこぼしている事に、私は戸惑わずにはいらなかった。

ユリ達は泣いていた。どうしてなのか、私にはわからなかった。

「…ごめんなさい、ごめんなさい…」

気が付くとたくさんの人が泣いていた。

何が本物で、何が偽物なのか。

私は分からなくなった。

それは葬儀場。

私の亡骸にすがりついて泣いているお母さん。

「まい…ごめんね…。もつとあんたのことを見ていれば、もつと愛せたのに…こんなことにならずに済んだのに…」

ナンデ、ナイテルノ？

そしてお父さんはぽつりと言った。

「あいつ、家族で海に行ったときのこと忘れちゃってたのかなあ…あいつ、貝を耳にあてて『波の音がする』って喜んでたのにな…」

何が本物で、何が偽物なのか。

目をつぶると『波の音』が蘇ってくるようだった。

そして、それは私が死んだ場所。身体を打ち付けられ、無惨な死体となったあの場所。

そこには2人の少女がいた。

「…まいちゃんに、一度でも電話くらいしてあげれば良かったな…」
「中学別々になってから一回も会ってなかったもんね…」

「まいちゃんは、確かに誰にでも良い顔したり悪いところもあったけど…良いところだってあったのに…」

2人は上を見上げた。

「痛かっただろうね…身体も、心も」

そして2人は声をあげて泣いた。

私はその光景をただ茫然と見ていた。

「まいちゃん、コアラのマーチ好きだったからあそこに供えてあげよう」

「まいちゃんが小6のとき好きだった小山君も連れてくれば良かったね」

彼女達は少しだけ笑った。

私の好きなものを知ってくれてる人は、この世にいた。

そして、それは屋上。私が最期の空を見た場所。

私は驚いた。

そこには、たくさんの花や手紙などがたむけられていた。

そこにはコアラのマーチもあった。

そして私は一枚の手紙に目を通した。

まいへ

本当にごめんなさい。

まいのこと好きになりたかった。

でもなれなかった。

モチロン、まいには良いところもあったよね。

今になって思うんだけど、まいが嫌われちゃってたのはそれなりのまいの事情があったんだと思う。

親のこと嫌いだって言ってたし、辛いこともいっぱいあったんだろ
うね。

私たち、まいの嫌なところ全てを受け入れられるほど心が広くなかったんだ。

でも、まいと私は関わりがあったんだもん、死んじゃうなんてとても悲しいよ。

まいが生まれ変わったら、たくさんの人を好きになって、みんなに愛されますように。

そうそう、美術の時間に学校に貼るポスター書いたでしょ？あれ、まいの作品が選ばれたよ。明日から廊下に貼られるからね。ごめんね。ありがとう。

ユリ

何が本物で、何が偽物なのか。

私は今やっと分かった。

この花と、手紙、そしてコアラのマーチは本物だって。

それだけじゃない。

私が楽しかった頃の記憶も、今ある現実も全て本物。

私が皆を信じていなかったから、何も行動しなかったから、自分は独りだと思いこんでいた。

でも違った。

私は独りじゃなかった。

どうしてももっと生きてる内に行動しなかったんだろう…。どうしてももっと皆を信じなかったんだろう…。

やりきれない想いに私は久しぶりに泣いた。

私は天を仰いだ。

空は雲一つない晴天だった。

真っ青な空。

きつとこの空は最期じゃない。ポスターが飾られ続ける限り。皆が私を忘れない限り。それらが私の生きた証だから。

「ありがとう」

私は、これから本物の世界でたくさんの空を見続ける。

2 真っ青な空。（後書き）

改行などめちゃくちゃですみません（汗）しかも初投稿の上、思いつきで書いた為何だかよくわからない話になってしまいました。皆様のご叱りや、ご感想お待ちしております。最後まで読んでくださって、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4638a/>

最期の空

2010年10月10日19時17分発行